

Title	パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (II)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 3 p.103-p.127
Issue Date	1990-09-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79497
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (II)

松 村 耕 光

The Anjuman-e Panjab and Its Efforts to Reform Urdu Poetry (II)

Takamitsu MATSUMURA

Muhammad Husain Azad, one of the important figures of Urdu literature, was born and educated in Delhi. His father, Muhammad Baqir, was a famous pioneer of Urdu journalism.

Like other in people in Dilhi, Azad suffered seriously from the “Indian Mutiny” in 1857. His father was arrested and sentenced to death, probably on the charge of treason. Azad fled from the destroyed capital and finally settled in Lahore after several years’ flight.

In Lahore, Azad entered the service of the Education Department, Panjab and then, became a member of the Anjuman-e Panjab, in which he made speeches proposing changes in social, economic and other crucial problems of the Panjab. His speeches were applauded by audiences and British officials, and he began to be considered as a leading social reformist and preacher of the Enlightenment in the Panjab.

Azad’s new vision on Urdu poetry was formed in the late 1860s and fully manifested on 19 April, 1874 when he made the famous speech advocating a new kind of Urdu poetry.

In this speech, Azad declared that the age of Persian had been replaced by the age of English, and he eagerly emphasized the necessity of studying English literature to renew Urdu poetry. But it would be misleading to say that Azad was a simple-minded Anglicist.

This is the second chapter of our study on the new movement in Urdu poetry led by Azad.

The contents are as follows:

Chapter 2 Muhammad Husain Azad

- (1) Life and works of Azad
- (2) Azad and the Anjuman-e Panjab
- (3) Azad's vision on literature
 - 1) Before 1874
 - 2) Azad's speech of 19 April, 1874

第2章 ムハンマド・フサイン・アーザード

(1) アーザードの生涯と著作

ムハンマド・フサイン・アーザード（アーザードは「自由な」という意味の雅号）は、1830年6月10日、デリーに生まれた。アーザードの祖先は、イラン人で、ムガル皇帝、シャー・アーラム II 世（在位1759-1806年）の時にイランからインドへ移住してきたと言われている。

アーザードの父ムハンマド・バーキル (Muhammad Bāqir) は、近代ウルドゥー・ジャーナリズム史上、きわめて著名な人物である。1836年に、彼は、『デリー・ウルドゥー・アクバール』(Delhī Urdū Akhbār) という新聞を発行したが、これは、北インドで最初のウルドゥー語の新聞であった⁽¹⁾。

アーザードの父ムハンマド・バーキルは、西欧の学問を教育するため、1825年、イギリスにより設立されたデリー・カレッジに学び、卒業後、1828年から1834年まで、カレッジで教鞭をとった。何を教えていたのかは不明である⁽²⁾。その後、官職に就き、郡長 (tahsildār) にまでなるが、汚職の科で辞職させられたと言われている。

アーザードもまた、初等教育を受けた後、1840年代後半に、デリー・カレッジに入学している⁽³⁾。何学科に入学したかは不明であるが、ファッルキーは、いくつかの理由から、アラビア語学科ではなかったかと推測している⁽⁴⁾。

在学中からアーザードの文章力や知識は相当のものであったらしく、1848-1849年次、1849-1850年次とウルドゥー語による論文審査で2回、優等になっている。最初の論文について、カレッジ校長は、次のように称賛している。

「数多くの情報が、この論文には、カリキュラムに含まれていない書物から採り入れられている。その理由は、この学生は、『デリー・ガゼット』、或は、『デリー・ウルドゥー・アクバール』と関係があり、そのため、ウルドゥーの新聞を読む習慣があり、それらの新聞から、非常に多くの有益な情報を得ていたからであった。⁽⁵⁾」

最初の論文の題目は不明であるが、二番目の論文審査の題目は、「イスラームとイギリスの政権下では国民の自由に如何なる違いがあったか」というものであった。

1850年代前半に、アーザードはデリー・カレッジを卒業し、『デリー・ウルドゥー・アクパール』の仕事をするようになる。

1857年の「インド大反乱」は、アーザードに大きな打撃を与えた。デリーがイギリス軍によって再占領された際、父ムハンマド・バーキルが逮捕され、そして処刑されてしまったのである。処刑の理由についてははっきりしたことは分らないが、ムハンマド・バーキルの家に逃げてきた、デリー・カレッジ校長テイラーが、暴徒に殺害されてしまったことや、『デリー・ウルドゥー・アクパール』が、ムガル皇帝を支持したことが、罪に問われたようである⁽⁶⁾。

アーザードにも逮捕状が出され、必死の思いでデリーを脱出、ラックナウへと逃走した。その後、数年間、ラホールに定住するまでの間、アーザードは、マドラス、ボンベイなどにまで逃避行を続け、各地を転々とした。

1860年代初頭、アーザードは、ラホールの郵便局職員となり、1862年か1864年に、パンジャープ州教育局に入局することになった。パンジャープ協会が設立されたのは、ちょうどアーザードの生活が一応の安定を見た時期であった。

1865年1月21日に設立されたパンジャープ協会に、アーザードは積極的に参加し、1867年には、協会の書記となっている。(アーザードとパンジャープ協会の関係については、次節で詳しく検討する。)

パンジャープ協会に参加し、活動を開始しようとした矢先、アーザードは、パンジャープ州政府より危険な仕事を命令される。ロシアの動向を探るため、中央アジアにスパイとして赴け、というのである。パンジャープ協会設立集会の議長を務めたパンディット・マン・プールを隊長とする、総勢四名のスパイの中の一人にアーザードは選ばれたのであった。

1865年7月、アーザードは、避暑地マリーに行き、そこで州政府より詳しい指示を受け、中央アジアへと向かった。9月17日にカーブルに到着、その後、ブハラ、サマルカンド、タシュケント、トルキスタン、バダクシャーと回り、カーフィリスターンを経てペシャワールに到着したのは1866年11月7日のことであった⁽⁷⁾。それから、アーザードは、カルカッタへ旅行、1867年初頭、ラホールに戻り、1867年3月13日のパンジャープ協会の集会に出席して、帰国報告、3月27日に、ライトナーによってパンジャープ協会書記に推挙され、活発な活動を開始する。

1868年6月、アーザードは、協会書記を辞任し、再び、パンジャープ教育局の職に就き⁽⁸⁾、教科書の編纂、政府の新聞の編集に携わる⁽⁹⁾。

この頃のアーザードの重要な著作として、教科書の他、『インド物語(第二部)』(Qışaṣ-e Hind)がある⁽¹⁰⁾。これは、ガズニー朝の誕生から、ナーディル・シャーの侵攻までの時代の歴史上有名な様々な人物に関するもので、1868年3月31日、パンジャープ教育局長ホルロイドがウルドゥー語の著作物のコンクールを翌年3月31日に行なう、と宣言したのに応じて執筆されたも

のと推定されている。このコンクールでは、一般文法、ベルシャ文法、インド史、インド偉人伝、ユークリッドの翻訳が審査の対象とされ、簡明な言葉を用い、ベルシャ語系の単語を出来るだけ避けるように指示されていた。アーザードは、『インド物語（第二部）』の他、ベルシャ文法も執筆し、これにより200ルピーの報奨金を獲得している。『インド物語（第二部）』がコンクールでどのように評価されたかは不明である。1882年に出版されたようである。

『インド物語（第二部）』以前にも、アーザードが、本を書いていたことが知られている。一番最初に書かれたのは、『無欠の鏡』（Ā'īnah-e shīḥat 1861年）で、出版はされず、現在では原稿も残っていないが、女子の教育を目的としたものであったようである。

1864年頃には、『忠告の耳飾り』（Naṣīḥat ka karan phūl）が執筆された。これは女子教育の必要を説く物語で、アーザードの死の3年前（1907年）に出版されたという⁽¹¹⁾。現在は入手困難で、筆者は未見である。

女子教育の振興は、当時の教育局が力を入れていたことの一つであり、以上の二作品から、アーザードがパンジャブ州教育局入局前後に、教育局の意に適うように努力していたことが分かる。

1869年頃、アーザードは、女兒の間引きの悪習の除去のキャンペーンの一環として、パンジャブ州政府が企画した論文コンクールにも論文を提出し、優等となって報奨金を獲得している。この論文は現在に残っておらず、パンジャブ協会の雑誌の1869年4月号に掲載された要約だけが残っている⁽¹²⁾。1860年代のアーザードは、以上のように、パンジャブ州教育局やパンジャブ州政府の政策や方針を忠実に実践しようとし、州政府主催の教科書や論文のコンクールには積極的に参加して自己の才能を認めさせようとしていたのであった。

1869年、ガヴァメント・カレッジのアラビア語教官が病気で休暇を取ったため、アーザードは代講を命じられた。翌年、この教官が死去したため、アーザードは専任のアラビア語教官に任じられた。

1870年代のアーザードの活動の中で最も重要なのは、言うまでもなく1874年から1875年にかけての、パンジャブ協会を舞台とした新詩運動の指導である。

1870年代初頭、アーザードにとっては都合の悪いことに、アーザードはライトナーと不仲になっている。ファッルキーによると、両者の仲がおかしくなったのは1871年で、アーザードが編集を任されていたパンジャブ協会の新聞『パンジャブのフマー鳥』（Humā-e Panjāb）が、シアルコートの郵便局の不正を暴く記事を掲載したことに端を発する。これは、アーザードが編集の任を解かれるという事態にまで至る。両者の関係は一応良くなったようであるが、さらに、この年に出版された『イスラーム年代記』（Tadhkirah-e Sanīn al-Islām）をめぐる騒ぎが生じたと推測されている⁽¹³⁾この本は、ジャーヒリーヤ時代からアッバース朝の滅亡に至るまでのアラブの歴史を簡単にまとめたもので、ライトナーを著者として出版されたが、実際は、ライトナーが資料を提供し、アーザードが執筆を担当したようである。

1880年、アーザードの主著と言うべき『生命の水』（Āb-e Ḥayāt）が出版された。二部構成になっており、前半はウルドゥー語の歴史、後半はワリーからガーリブに至るまでの古典ウルドゥー

詩の発展を、各時期の主要詩人の伝記や代表的詩句を通して、段階的に扱っている。事実関係に多くの誤りがあり、今日では信頼するに足るウルドゥー詩史とは見做されていないが、有名詩人の興味深い逸話を簡潔で効果的な筆致で描いた本書は、今尚、多くの読者を持っている。

『生命の水』は、有名なウルドゥー詩人モーミン (Maumin) の記述を含んでおらず、これはアーザードのシーア派的偏見によるもの、と非難されたりしたが⁽¹⁴⁾、本書を高く評価する者も多く、初版1,050部は2年で売り切れ、パンジャブ・ユニヴァーシティが、本書をカリキュラムに含めたこともあって、1883年に、第二版が2,000部出版されることとなった。第二版で、アーザードは、多くの加筆訂正を行ない、モーミンの伝記も付け加えられた⁽¹⁵⁾。

1880年には、この『生命の水』の他に、『空想の魔術』 (Nairang-e Khayāl) も出版されている。これは、寓話集で、ムハンマド・サーディクの研究により、Johnson Addison 等の作品を翻案したものであることが判明している⁽¹⁶⁾。ファッルキーによると、『空想の魔術』のいくつかの作品は、既に、1875年からカスールの啓蒙団体 Anjuman-e mufid-e ‘ām, Qaṣūr の雑誌に発表されているとのことである⁽¹⁷⁾。『空想の魔術』の現行版は二部構成になっているが、1880年に発表されたのは、第一部のみであった。『生命の水』と共に、この『空想の魔術』もユニヴァーシティのカリキュラムに加えられたので、1883年には第二版が出版されたが、これも第一部のみであった。第二部と共に出版されたのは、1923年のことである⁽¹⁸⁾。

1884年、アーザードは、ガヴァメント・カレッジのアラビア語、サンスクリット語教官をオリエンタル・カレッジに移すという州政府の決定により、オリエンタル・カレッジへ移った。

翌1885年、アーザードは、念願のイラン旅行に出かける。9月23日、ラホールを出発、汽車でカラチに行き、そこから海路イランへ入った。イラン各地を旅行した後、陸路、アフガニスタンを通してインドに戻る、という大旅行であった。ラホールに帰着したのは、1886年7月24日のことである。

1887年、アーザードは、「シャムス・ル・ウラマー」 (Shams al-‘ulamā 学者の太陽といった意味) という称号を受けた。ザカーウッラー、ナズィール・アフマド、ハーリーといった同世代の人達の中で、アーザードが最も早くこの称号を政府より送られている。

アーザードの名声は頂点を極めるが、1885年頃からアーザードは正気を失い始めていた。原因は明白ではないが、愛娘の死が大きな要因となったようである。1890年、アーザードは、裁判所より禁治産者の宣告を受けている。

アーザードが正気を失ってからいくつかの重要な著作が、周囲の者の手によって出版されている。まず、1898年に、大著『アクバルの宮廷』 (Darbār-e Akbarī) が出版された。アーザードは、ムガル皇帝アクバルを好んでいたので、アクバルとその時代について、800ページを超す書物を書き上げたのであった。

1907年には、アーザードの主要著作の一つである『ベルシャの詩人』 (Sukhandān-e Fārs) が出版されている。これは一つのまとまった著書ではなく、講演集である。二部構成になってお

り、第一部は、言語学の紹介、サンスクリットとペルシャ語の歴史的変化や両者の共通性を扱い、第二部は、ペルシャ語の歴史的変遷やペルシャ詩の歴史を論じたもので、ファッルキーによると、第一部は1872年に行なわれた講演、第二部は1874年の講演である。第一部のみ、小冊子の形で、1872年に出版されているようである。本書『ペルシャの詩人』は、アーザードの、言語に対する深い関心を如実に示しているばかりでなく、言語というものは、社会的、地理的要因、他の文化との接触によって変化するものである、という、アーザードの言語観が体系的に語られており、アーザードの文学、思想を考える上できわめて重要な資料となるものである。

アーザードは、1910年1月22日に死去したが、それから約10年後、1922年には、イランやインドのペルシャ語詩人35名の伝記とその代表的詩句を収めた『ペルシャの画廊』(Nigāristān-e Pārs) が出版された。執筆されたのは、1872年以前であろうと考えられている。

アーザードが、1874年から1875年にかけて、パンジャーブ協会の詩会のために書いた詩やその他の詩は、『アーザード詩集』(Naẓm-e Āzād) に収められている。タバッスム・カーシミーリによると、『アーザード詩集』は、1899年、ムムターズ・アリー (Mumtāz ‘Alī) 編集によるものと、アーザードの息子アーガー・ムハンマド・イブラーヒーム (Āghā Muḥammad Ibrāhīm) によるものとが出版されている。前者の正式名は、『心を輝かせる詩、即ちアーザードの詩集』(Naẓm-e Dīlfarōz ya ‘nī Majmū‘ah-e Naẓm-e Āzād) であり、ナズム、ガザル、そしていくつかの詩句を含むものであった。後者には、パンジャーブ州教育局長を務めたホルロイドへの献詞が付けられており、1910年には、ガザルやカスィーダ等を増補した第二版が出版された⁽¹⁹⁾。アーガー・ターヒル (Āghā Tāhir) の編集による、1926年の第三版からは、ガザルやカスィーダ等が除かれている。

1932年には、アーザードのナズム、ガザル、カスィーダを収めた『アーザードの酒場』(Khumkadah-e Āzād) という詩集が発行されているが、筆者未見である。

アーザードの重要な仕事の一つに、ムガル皇帝バハードゥル・シャー II 世^{ウスタード}の詩の師匠として有名な、シャイク・ムハンマド・イブラーヒーム・ゾウク (Shaikh Muḥammad Ibrāhīm Dhauq 1790–1854年) の詩集の編集が挙げられる。ゾウクは、アーザードの父ムハンマド・パークル^{ウスタード}の親しい友人であり、アーザードの詩の師匠であった⁽²⁰⁾。アーザードはゾウクを深く敬愛し、ゾウクの死後、その詩集を編集、出版しようとしたが、1857年の「インド大反乱」で実現することが出来なかった⁽²¹⁾。1888年頃、編集作業が終了、1891年、ようやく『ゾウク詩集』(Dīwān-e Dhauq) が出版の運びとなったが、現在までの研究で、アーザードが相当の改竄を行なったことが明らかとなっている。

(2) アーザードとパンジャーブ協会

アーザードは、パンジャーブ協会創立時の会員35名の中の一人であった。当時のアーザードの

肩書きは、パンジャブ教育局事務主任補佐で、1857年の「インド大反乱」、その後の逃亡生活からようやく解放され、安定した生活を始めるようになっていた⁽²²⁾。1864年12月から、アーザードは、同年11月に、ガヴァメント・カレッジの校長として着任したライトナーにウルドゥー語を教えるようになっており、ファールキーは、これが両者を結び付ける機縁になったと考えている⁽²³⁾。

1865年1月21日のパンジャブ協会設立以前に、アーザードは、1861年に『無欠の鏡』、1864年に『忠告の耳飾り』という、女子教育の本を執筆し、パンジャブ教育局の方針に沿った形で自己の才能を示そうとしていたから、パンジャブ州政府の支持を得て、啓蒙活動によってパンジャブの文化・社会を発展させようというパンジャブ協会の設立は、アーザードの目に好機到来と映ったことであろう。

アーザードは、早くも、1865年2月11日のパンジャブ協会第三回会合で講演を行なっている。題目は、「インド人の貧困の除去と繁栄の獲得」というもので、衰退した産業を再び発展させるために、産業家は一つの協会を設立して、紙や衣類を製造する機械を外国から輸入すべきこと、個人間の商業を改めて、商業の組織化を図るべきこと等を訴える、パンジャブの経済発展に関する内容の講演であった。

次いで2月24日、アーザードは、「インド人は自分達の繁栄のために自分達で努力すべきであり、優れた機械を取り寄せるべきである。」という講演を行なったが、これも経済問題を扱ったものであった。

4月7日の会合でも、アーザードは、「インド商業の発展」という、経済問題を論じる講演を行なっている。この講演の次の結論部の一節は、この頃のアーザードの経済に対する考え方を明瞭に示している――

「皆さんの国の山は、鉄を金とする石。皆さんの国の土は、錬金の妙薬。皆さんの河の水は、黄金の水。皆さんの先祖の偉業は、今日でも歴史書を飾っています。そうなのです、手段と改革によってそれを役立たせなければなりません。この中国の画廊は暗闇の中に置かれているのです。外国の人達が、それから全ての利益を取り、我々が目を閉じて坐しているのは、悲しむべきことです。勇気を出して下さい。勇気を出して下さい。そしてこの勇気の装束を手から放さないで下さい。再びこのような時は得られないでしょうから。このような好機の時と平和の時代を授けて下さったことを神に感謝して下さい。政府が作って下さったこの学芸の庭に、有望な苗木が生まれ、自分の祖国がこのようなひどい状態にあるのを見ることは出来ないだろうということは、はっきりと確信出来るところであります。しかし、この偉大なる闘いの勝利が皆さんの名に於いて得られるならば、何と素晴らしいことでありましょう。皆さんの名は残り、祖国の人々の役にも立つことでありましょう。あの有望な者達にも進歩への刺激、卓越への勇気が起こることでありましょう。」

「ここで、以前に述べた事柄を再び思い起こしてもらうために繰り返します。このような仕事のためには、特に、ソサイエティー(協会)の開設、会議の開催が必要なのであります。そして、

元気を出して下さい。一つの集団が良い事のために勇気を出して集まる所には、神の助けが現われるのです。良いですか、ボンベイの商人達は、最近、35万ルピーを集めて、インディゴ、綿、様々な穀物を栽培するソサイエティーを設立しました。アリーガルなどでは、同じように、綿を紡ぐ機械が注文されました。カラチの商人達は布地の機械を注文しました。優しい両親が自分の可愛い子供達を訓育するように、政府は、どうかして我々が、自分の事は誰の助けもなしに一人でやり遂げるような能力と高い勇気の持ち主となることを、心から望んでいるのです。神がこの政府をお守りになりますように、そして、その繁栄に日毎の進歩をお与えになりますように。」

政府の援助を当てにせず、自助自立の精神を以って、共同して産業の機械化を図ること——これがアーザードの主張であった。『アーザード論文集』第1巻の解説によると、アーザードのこの講演は、大いに称賛され、この会合に出席していたパンジャブ州事務次官は、アーザードを脇に坐らせて、称賛したということである⁽²⁴⁾。

ところで、アーザードは、イギリスの支配をどのように考えていたのであろうか？ 当時のアーザードの政治的見解は、1865年4月29日、パンジャブ州知事マクレオドを迎えて開かれた会合の席上、アーザードが行なった「インドの民に対する過去及び現在の統治者の関係」という講演に明白に示されている。この講演は、政府と臣民との関係はどうあるべきか、という問題を論じたもので、インド人の行なうべき努力について述べているだけでなく、イギリス側にも努力を求めている点で注目すべき講演である。即ち、この講演の中で、アーザードは、インド人は文明を生み出すこと、誠実さや正直さ、規律、熟慮、勤勉さ、善意、協調心、簡潔な話し方、時間の尊重といった美德を身に付けること、逆に、身勝手、陰口、怠惰といった悪徳を捨てることが必要であり、身は清潔に、家はきちんとしておかなければならない、などと述べ、美德を身に付けて統治者の心を引くようにすべきである、と説いているのであるが、このように、インド人側の努力を力説する一方で、アーザードは、次のように、イギリス側にも注文をつけているのである。

「我々は、何としてでも、学芸の発展、富の蓄積を図るでしょうが、閣下が、我々の未熟な点に目をおつぶりにならず、恩情によって名誉をお授けにならず、有能な人に仕事をする榮譽をお与えにならない限りは、我々の努力は無力、尽力は無益であります。」

「高貴なる統治者の皆様方！ 我々の短い手は、皆様方の高さにある装裾にまで届きませんが、皆様方が恩情の装裾を広げて下さり、皆様方の援助が得られましたならば、我々は心より、こう申し上げることが出来ます。皆様方のような統治者は地上にいないと。しかし、閣下にもまた確信して頂きたいのですが、我々のように従順で、受容力のある臣民は、この七つの世界に得られないのであります。神が、我々の忠誠を皆様方に対して、皆様方の統治者としての恩情を我々に対して、天恵とされ続けますように。皆様方の繁栄の木影の中で、学問の進歩と身心の浄化が得られますように。」

以上のように、インド人は精神、生活態度を変革してイギリス人の心を把えるようにすべきであり、イギリス人はインド人に対して恩情の目を向けるべきである、というのがアーザードの主

張で、インド人、イギリス人双方の歩み寄りが必要であると説いているのである。アーザードのこの講演は、この会合に出席していたパンジャブ州知事マクレオドを始めとするイギリス人高官を意識していることは明白で、彼らに対するアピールといった趣がある。

『アーザード論文集』第2巻によると、アーザードは10月3日に「教育の奨励と民衆」という講演を行なったことになっている。これもまた、インド人のために改革の努力を行なってくれている政府の下で、政府と協力しつつ、インド人は団結すべきであり、知識を獲得してゆくべきである、と説く内容のものである⁽²⁵⁾。

以上が、パンジャブ協会が設立された1865年に、アーザードがパンジャブ協会で行なった講演の概要である。アーザードは、こういった講演活動の他、3月3日にはアラビア語試験実施委員、4月14日には教育局振興委員会委員にも選ばれている。

アーザードが、中央アジア探査旅行、カルカッタ旅行を終え、ラホールに戻って再びパンジャブ協会の会合で講演を行なうのは、1867年3月13日のことである。カルカッタの文化的状況を伝え、相互協力、自助自立の精神を以って新しい知識を獲得せよと訴えるこの講演を皮切りに、アーザードは、毎月、講演や講義を行なうようになる。また、3月27日の会合で、アーザードは、ライトナーにより、パンジャブ協会書記に推挙されると共に、協会の雑誌も任せられることとなる。

1867年にアーザードが行なった講義・講演活動は、およそ以下のようなものであった。

「ウルドゥー語」(4月 講演)⁽²⁶⁾

「財務局による書物への課税の廃止について」(4月3日の会合での講演)

「競売者の不正」(4月10日の会合での講演)

「現今の児童教育」(協会の雑誌5月号に掲載)

「知識獲得の本当の目的は何か」(協会の雑誌7月号に掲載)

「全てのことをよく考えて慎重に行なうこと」(同上)

「インド人の思想の墮落とその発展と勇気のための講演」(協会の雑誌8月号に掲載)

「衣服」(同上)

「ウルドゥー詩の創始者ワリー」(同上)

「詩と韻文について」(同上)⁽²⁷⁾

「ソウダーの師シャー・ハーティム」(協会の雑誌9月号に掲載)

「ウルドゥー詩人シャー・ヒダーヤット」(同上)

「有益な書物が普及していないことについて」(同上)

「アブー・アリー・スィーナー」(同上)

「イギリスの学問の翻訳書」(10月26日の会合での講演)

「協会の図書館」(12月7日の会合での講演)

「ラホール博物館」(同上)

「現今の利子」(協会の雑誌12月号に掲載)

「数学等と学術用語の翻訳」(同上)

1868年の講演、講義の内容は、大体以下の通りである。

「類似療法」(協会の雑誌1月号に掲載)

「ベルシャ語とウルドゥー語の散文について」(協会の雑誌2月号に掲載)

「今日の教育」(協会の雑誌3月号に掲載)

「昔、インド、アラビア、ベルシャで、文人達は学芸に於いて如何に進歩を遂げたか」(4月4日の会合での講演)

「学術的で正確な学問は如何にして獲得されるか」(4月11日の会合での講演)

「引力について」(4月25日の会合での講演)

「物理学の諸問題」(協会の雑誌4月号に掲載)

「物理学の諸原則」(5月9日の会合での講演)

「引力」(5月16日の会合での講演)

「運動と静止」(5月18日の会合での講演)

「文明の奨励と学芸の獲得」(協会の雑誌8月号に掲載)

アーザードは、1868年6月にパンジャブ協会書記の職を辞し、パンジャブ州教育局の仕事に復帰している。教科書の編纂等の仕事に忙殺されるようになったようで、この時期以降、パンジャブ協会とは疎遠になっていったものと思われる。

1865年から1868年まで、中央アジア偵察旅行、カルカッタ旅行の時期を除いて、アーザードは、パンジャブ協会を舞台に、精力的な講義・講演活動を行なったが、その講義・講演活動の範囲たるや、上記の講義、講演題目からも推測出来るように、経済、社会、教育、科学、文学、語学等、多岐に亘っている。アーザードと言えば、華麗な文体を駆使する文学者という印象が強いが、パンジャブ協会を中心として活躍していた時期のアーザードは、当時の社会的問題を様々な角度から取り上げ、パンジャブ社会発展の途を指し示すべく努力する社会改革者であり、西欧の学芸を紹介し、人々を啓蒙しようとする啓蒙思想家であった。パンジャブ協会というパンジャブを代表する社会啓蒙団体で多面的な知的活動を展開していたアーザードは、当時のパンジャブを代表する社会改革運動家、啓蒙思想家であったと言わなければならない。しかし、例えば北西連合州のアフマド・カーンのように継続的に活動を行なわず、1868年、パンジャブ協会からパンジャブ教育局へ移り、さらに、1869年にガヴァメント・カレッジのアラビア語教官となつて、社会改革、社会啓蒙の活動から離れてゆき、教育や文学の方面に力を注ぐようになったこと、そして、ウルドゥー詩史『生命の水』を始めとする文学関係の著作が有名となったことなどにより、パンジャブ協会時代のアーザードの知的活動は忘却されがちである。しかし、このパンジャブ協会時代のアーザードの活動は、思想史的にも重要なものがあり、今後、当時の時代状況と関連させつつ、正当に評価しておかなければならないであろう。

（3）アーザードの文芸思想の展開

1) 1874年の詩会以前

1874年4月19日、パンジャブ州教育局の指導の下で開催された、新しい詩を創造するための講演会で、アーザードは、新しい詩について自分の考えを述べる講演——近代ウルドゥー詩運動のマニフェストとも言うべきもの——を発表したが、アーザードの、ウルドゥー詩に関する革新的な考え方は、突如として現われたものでもなく、また、パンジャブ州教育局長ホルロイド等、州政府の官僚の考えの受け売りでもなく、社会改革、社会啓蒙をその主要関心としていた1860年代後半のアーザード自身の文芸思想の延長線上にあるものであったと言わなければならない⁽²⁸⁾。既に見たように、アーザードは、1865年から1868年にかけて、数多くの講演を行なったが、その内の三つの講演、即ち、「ウルドゥー語」（1867年4月）、「詩と韻文について」（1867年8月）、「ペルシャ語とウルドゥー語の散文について」（1868年2月）の三つの講演には、ウルドゥーの詩や散文の現状に対する不満、新しいウルドゥー文学創造についての模索が見られるのである。

まず、1867年4月の講演「ウルドゥー語」について見てみよう。この講演は、ウルドゥー語やウルドゥー文学の歴史に関するもので、「現代の著作物の中では、『諸王朝の遺跡』の文体、科学協会創立者ナワブ・サイイド・アフマド・カーンの言葉が規範となり得ます。何故なら、雄弁、流麗、そして気取りのないものだからであります」とアフマド・カーンの近代的散文を高く評価している点が注目される。さらに、この講演の中でアーザードは、過去に於いてペルシャ語の単語の合成語や曖昧な表現法等を止めようとする努力がなされたのに、それがうまくいかなかった理由として、まず第一に、ウルドゥー語は、アラビア語、ペルシャ語、ヒンディー語の混成語であり、ペルシャ語では、曖昧な表現法が好まれていること、そして、ヒンディー語に於いては、一つの単語が多義的であるため、曖昧な表現法がよく行なわれること、を挙げ、そして次のように述べている——

「まさにこの理由で、我々の詩には、単に幻想的、空想的な内容しかなく、そして、韻文や散文の我々の歴史の本は、このために、役に立たないものなのであります。サンスクリットの本は全て、比喩で著作されているくらいなのであります。一つの明瞭な内容を明解に表現することは、我々の詩人達にはきわめて難しいこととなっているのであります。注意してみますならば、このことは、雄弁さに大きな欠点を与えるものであります。この欠陥は、大いに流布しており、今日では、もし誰かが望んだとしてもその改善すら可能ではないでしょう。著作者の一隊をなしてきたのは、その原則が、このことの上に打ち立てられているような人々だからです。この人達の後に生まれた人達は、今日でも、この人達への追従を名誉あることと見做しているのです。もっとも、このマドラサの学生諸君に——彼等は成長しつつある著作家の苗木です——彼等にその盛衰が示され、彼等を神が著作家とされ、そして、彼等もそのことに注意を払ったならば、まちがい

なく、数年の後には、このことは改善されることとなり、そして、文章から、伝えたいことを持つ人達の、本当に伝えたいことが理解されるようになるでしょう。」

以上のようにアーザードは、過去からの伝統、及び伝統追従によって、ウルドゥー詩の内容は曖昧であり、非現実的、そしてその内容は明解ではないと断じ、若い世代に期待をかけていたのであった。

次に、1967年8月の講演「詩と韻文について」を見てみよう。この講演は、誰かの指示により行なわれたもののようで、詩というものについて、詩は散文よりも力強い、詩人は画家である、肉体にとって食物が必要であるように、精神にとって詩が必要である、といったことから、詩の効用、詩作に適切な季節、状態、時刻といったことまで、様々な角度から分かり易く論じている。この講演に於いて注目されるのは、アーザードが、詩を単に技巧の問題として考えてはおらず、詩人の内面を重視して考えている点である。アーザードは、こう述べている――

「詩人は、その性質はきわめて有能で、受容力があり、感受性がなければなりません。表現しようとする状態の影響は、まず、自分の心に現われねばならないのであります。流れる水のように、それに降りかかった色がその色となるのであり、そして、通りかかった物の上に、その色を与えるのであります。もし、人々の気分を喜びの状態にしたいのであれば、まず、自分が喜びに打たれて大喜びしなければならぬのであります。言いたいことが、詩人の自分自身の心に影響がないのであれば、他の人々に何の影響があるのでしょうか。」

自分がまず感動し、そしてその感動を人々に伝えるべきである、というアーザードの主張は、当時の技巧中心の詩に対する批判であるのは言うまでもない。アーザードによれば、詩を墮落に至らしめたのは、君主などの政治権力者達であった。アーザードは言う――

「元々、詩作することは、優れた学者の業績に数えられており、その人達の作品と現在の作品との開きは、天と地ほどの差があります。もっとも、雄弁性、伝達性は今の方が多くありますが、詩想はひどいものとなってしまっています。その原因は、君主や時の統治者の悪習であります。彼等が高く評価した事柄に於いて人々は進歩を遂げていったのであります。さもなければ、この詩作に於いて、優れた資質の詩人達は、立派な本を書いたのであります。それらの本の根底にあるのは忠告であり、それらによって外面内面の教えが得られるのであります。つまり、例えば、サアディー、ルーミー、サナーイーそしてナースィル・ホスローの作品は、この種のもののなであります。」

このようにアーザードは、詩の墮落の原因を支配者の悪習とそれに追従する詩人達という関係の中に求め、そして、次のように詩の改革を訴えてこの講演を結んでいる――

「ともあれ、この協会の設立と皆様方の御参集のおかげによって、他の長所、短所の普及、改革が考慮される所では、詩の芸術のこの欠陥も考慮され続ける、ということも期待されるのであります。たとえ今日でなくとも、恐らく、何時かはその善い結果が得られるという強い確信があるのであります。この高貴な芸術は、長期間、ひどい状態に陥っており、日に日に悪化している

のでありますから。」

アーザードの、当時の文学に対する不満とその改革への志向は、パンジャブ協会で開かれた詩会で読まれ、パンジャブ協会の雑誌1868年2月号に掲載された「ベルシャ語とウルドゥー語の散文について」という講演にも見ることが出来る。

「この会合は、詩会という名を得てはおりますが、実の所、その任務となっておりますのは、東洋諸語の散文の普及のため、ということなのであります。私はいつも、出席者の皆様方に、我々のウルドゥー語やベルシャ語の散文は、実際の所、改正、改革の余地があると申し上げてまいりました。今日もまた、これに関して、少しお話ししようと思うのであります⁽²⁹⁾」と切り出されたこの講演の中で、まずアーザードが問題としているのは、内容よりも修辭が文芸の中心となってしまう事態であった。アーザードによれば、何時頃からか、文芸家達は、文芸の中に修辭という「塩」を入れ始め、愚かな人々もその真似をして、「結局、塩だけが残ることとなってしまったのです。雄弁さや叙述性は棚上げとなり、本来の内容は間から脱け出してしまったのです。」

内容よりも華麗な修辭を優先させる文芸が創作されてきた原因は、人々がそういう文芸を好み、文芸家達はその好みに合わせて人々の称賛を得ようとしたためであり、「さらに悪いことには、王や時の権力者がそのようなものに褒美を与えたのです。金銭欲のために、他の人々も墮落し、誰にも改革の考えは起こらなかったのです。」

この結果、中味のはほとんどない文芸が生み出され、詩に於いては、世俗の恋愛に関して使うような詩題や詩語が、あろうことか、神に対しても用いられるようになり、神に恋しているのだ、として好き勝手に詩を書くようになった、とアーザードは述べ、このような神秘主義的な詩句という悪習は宗教にも入り込んでいった、と非難している。これに続けて、アーザードは、そのような内容の詩句がなければ詩に面白味がないと言う人々に対して、それはそうではあるけれども、それでは、まともな内容を表現する力が詩人からなくなり、表現に弱さが現われてき、そのため、知的な事柄、世の役に立つ事柄を書こうとする際、表現に苦勞するようになるだろう、と反論し、恋愛以外の内容で詩を書くべきことを訴えている――

「或る人がこう言いました。あなたの言わんとする所が分からない。つまり、もし、詩句にそのこと（恋愛の詩題のこと――引用者註）がないなら、一体何があるというのか、と。それにはこう答えられました。あなたは、神のおかげで、詩人です。詩句を見て下さい。ガザルのカーフィヤが同じでも、或る人はそれを逢瀬の詩題のために、或る人は別離、或る人は春の歌、或る人は天の苦しみ、或る人は神の認識のために用いました。ですから、あなたがそれをいつも恋愛の側面だけから用いなければならないということがあるのでしょうか。もし、これら全てのことは別の、何か側面があっても、少しも罪や病気の原因とはならないでしょう。」

恋愛以外の詩題で書いても面白い詩が書けなかった、という者に対しては、アーザードは、それは恋愛詩ばかり書いていたので表現力がなくなり、別の詩題で書けなくなったに過ぎない、と反論し、恋愛以外の内容でも、詩人に表現力さえあれば興味深いものになる筈であると主張、次

のようにこの講演を結んでいる――

「ところで、考えるべきは、ガザルの形式では、一つの詩想が最初から最後まで十分に盛り込まれることはあり得ないということであります。もし、あり得たとしたら、不自然なものとなるでしょう。従って、マスナヴィーを採用すべきなのです。それどころか、西欧の詩人達は、作品の真の目的は内容の見事なる表現であるのを見てとると、彼等はガザルやカスィーダの形式をやめ、単に韻律の伝統を残しただけで、ラディーフやカーフィヤすらも捨て去ってしまったのです。疑いもなく、束縛が多い程、表現の美しさや内容の表現に困難が生じることでしょう。ともあれ、所変われば品変わるで、彼等は彼等の思ったようにすれば良いのです。諸君には、神様は言葉に力を与えて下さったのですから、マスナヴィーの形式で素晴らしい内容と有益な物語を書いて下さい。そして、簡明で雄弁な散文で表現して下さい。数多くの論文が、力強い文章で、科学協会の新聞に掲載されています。書き下ろされたものも、英語から翻訳されたものもありますが、それらを見ることによって、自分の思想の改革が行なわれるばかりでなく、全国、全ての同胞の現状と未来の改革が行なわれるのであります。ですから、このような馬鹿げた行動や無益な行為に比べて、もしそちらの方に関心が向けられたなら、素晴らしいことなのであります。」

以上のように、アーザードは、既に1860年代後半の時期に、内容を忘れて形式面にばかり目を向ける文学の状況を批判して、文学の改革を訴え、詩に関しては、西欧の詩人達の動きを念頭に置きつつ、恋愛以外の詩題について書くべきこと、ガザルでは一つの思想を一貫して述べるのが難しいので、マスナヴィーの詩型を用いるべきであると説き、散文に関しては、アフマド・カーンが指導していた科学協会を中心として普及してきた、簡明にして雄弁な文体を見倣うべきこと、そしてそのようにして、国民の思想の改革を行なうべきことを唱え、詩と散文の抜本的な改革を目指そうとしていたのであった。

マスナヴィー詩型によって一貫した思想を表現しようというアーザードの試みが実行に移され、ウルドゥー詩の改革が始まるのは、1874年の所謂「パンジャブ協会の詩会」に於いてであるが、散文の改革は、既に、急速に展開していた。ジャーナリズムの勃興やアフマド・カーンの科学協会を中心とした活動等により、ウルドゥー散文は装飾過剰の文体から、内容重視の簡潔な文体へと移行しつつあったが、パンジャブでは、教育局の活動もウルドゥー散文の変革に大きな影響を与えていた。ホルロイドの指示によって、1864年に執筆され始め、1868年に出版された『インドの慣習』（Rusūm-e Hind）は、簡明なウルドゥー語で北インドの宗教や慣習等について記した書物であり⁽³⁰⁾、近代的ウルドゥー散文の一つのモデルとなったと考えられるが、この他にも、ホルロイドは、1868年3月31日に、翌年の3月31日にウルドゥー著作のコンクールを行ない、優秀な作品に報奨金を与えると宣言して、ウルドゥー散文の発展を刺激しようとしている。このコンクールの対象となったのは、

- 1) 文法一般
- 2) ペルシャ語文法

3) インド史の中から、重要な出来事や人物の物語

4) ユークリッドの本の翻訳

であり、簡明な言葉を使うこと、可能な限りペルシャ語の文章やイディオムの使用を避けることが条件とされていた。このようなホルロイドの新しいウルドゥー散文育成の試みは、アーザードの文学改革理念と一致するものでもあり、アーザードは、自ら、ペルシャ語文法書と『インド物語』(Qışaṣ-e Hind)を執筆してコンクールに応募している。(無論、アーザードの世俗的野心も動機となっていたことであろう。)

ウルドゥー文学を改革し、新風を吹き込もうというアーザードの姿勢をよく示すこの頃の作品として、『女兒の間引き』(Dukhtar kushī)という戯曲に注目しておく必要がある。この戯曲は、当時、民間で広く行なわれていた女兒の間引きの慣習を止めさせるために書かれた啓蒙的な韻文交じりの戯曲である⁽³¹⁾

この戯曲を書く動機となったのは、パンジャブ州政府の女兒の間引き反対運動であった。この悪習を廃止させるため、パンジャブ州知事マクレオドは、反対運動の一環としてこの悪習に反対する論文を公募し、コンクールも行なっている。アーザードは、これに応募、入賞している。このことから、アーザードが、パンジャブ州政府の反対運動に関心を持っていたことは明らかであり、戯曲『女兒の間引き』も、当時の州政府の動きに呼応して書かれたものと考えられる。

戯曲『女兒の間引き』の登場人物は次の6名である。

1. ダルム・スィング (ラーエ・スィングの父)
2. ラーエ・スィング
3. ダルム・スィングの妻
4. ラーエ・スィングの妻
5. 産婆
6. ムフティー (イスラーム法官)

舞台はパンジャブで、荒筋は以下の通りである――

商人ダルム・スィングの息子ラーエ・スィングは、ベナレスへ勉強に赴き、ヴェーダ、シャーストラを学ぶ。さらにカルカッタで学芸を学び、故郷に戻ってくる。ラーエ・スィングの妻は妊娠している。或る日、ダルム・スィングとラーエ・スィングが一緒に居る所へ、産婆が来て、女の子が生まれました、と報告する。ダルム・スィングは始末するよう指示する。ラーエ・スィングは止めようとするが、父ダルム・スィングは、慣習であるから、と言って相手にしない。ラーエ・スィングは、慣習に囚われるべきではないと反論するが、ダルム・スィングは、次のように息子を諭す。

「おお、息子よ！ お前に何と云えばよいのか。恥辱が一つだけなら人は我慢しよう。大変なのは、婚家に行って姑や小姑の非難、その厳しい支配、主人の意地の悪さ、手元の不如意、即ち様々な苦勞を耐えねばならないが、それは^{はしため}端女よりも辛いことなのだ。何と云えばよかろう。

お前こそ考えて見よ。娘もまた血を分けた者であるのだ。見るに耐えないことは神様が御存知だ。その毎日の苦しみより、娘にとっても我々にとっても、生まれたらすぐ死んでしまうことの方が良いのだ。」

ラーエ・スィングは、物事をわきまえ、教育のある女性はそのような目にあたりしないでしょう、と反駁し、女子の教育の必要を説く。慣習を変えることは出来ないと言う父親に対し、若者を啓蒙すれば良い、と息子は述べる――

「知識の影響が、彼等の心と精神に十分に及んだなら、その時自ずと目が開くことでしょう。いいですか、昔のことではなく、20年、25年前のことなのです。この国で大変な信念によって人々が女性にサティー（寡婦殉死）をさせていたのは、今日、そのような家では、もし誰かが動物を焼き殺そうとしたら、その人々の心は悲しむのです。ましてや母や姉を焼き殺すことなど。これはほんの数年の教育と訓育のおかげなのです。」

その後、父と息子の論争は、幼児婚、結婚式の出費、持参金等の問題に移り、ムスリムの話も聞いてみようとする二人はムフティーの所に行き、夫とするにはどのような人物が良いか、と質問する。財産ではなく人となりを見るべきであるとムフティーは答える。父ダルム・スィングは、結婚の問題はバラモンが掌握しているからどうしようもない、と言うとラーエ・スィングは、バラモンはこの問題に介入すべきではないし、人々もまたバラモンを介入させるべきではないと答える。ここに至ってようやく父も息子の意見に同意し、他の人々にも息子の考えを聞かせるべく、翌朝、人々を家に集め、息子に説教させることにする。

翌朝、ヒンドゥーやムスリムの人達が集まって来、ラーエ・スィングが、ヒンドゥー教の聖典を引用して女兒を間引すべきではないと説き、ついでムフティーが、『コーラン』を引用して同じようにこの悪習の廃止を説く。

以上が、戯曲『女兒の間引き』の荒筋である。ウルドゥー文学に於いて未だ近代的演劇というもの確立されていなかった時期に、女兒の間引きという慣習を止めさせるためにアーザードが戯曲を執筆していたことは、アーザードが州政府の動きに敏感であったことを示しているばかりでなく、文学の幅を広げよ、という自らの主張を実践しようとしていたことをも示しており、この『女兒の間引き』は、アーザードの文学観を知る上で、きわめて重要な作品であると言わなければならない⁽³²⁾。

2) 1874年のアーザードの講演

次に、1874年4月19日、アーザードが行なった講演について検討してみることにしよう。

アーザードは、講演を、「高貴なる出席者の皆様方！ 今日、私がここに参りましたのは、私の身の程を超えた事柄についてお話するためであります。何故なら、それは、実の所、世界の人々がインドの国と呼んでいるこの国の、広汎な言語についてであるからであります。その有様は、

愛国心がどうしても沈黙させてはおかないようなことになっているのであります。一体その事柄とは何なのでしょう。それは、我々のあらゆる内容の表現、一般の著作、気晴らしの手段であるところのウルドゥー語の詩と文のことです」という言葉で始め、まず、ウルドゥー語の歴史を簡単に振り返って、ウルドゥー語はインドのブラジ・バーシャーが起源であり、ペルシャ語の影響が加わったものであること、初めは会話用語であったが、次第に文学用語となっていたことについて述べている。そして注目すべきことに、ペルシャ語の影響の悪い面を、次のように、アーザードは指摘する――

「ウルドゥー語の使用者は、ペルシャ語を使っていた人々の子孫でありました。それで、彼等は、全てのペルシャ語の韻律やペルシャ語の興味深く、華麗な発想や様々な美文の^{フोटグラフ}写真^ををペルシャ語からウルドゥー語に移したのであります。驚くべきことに、それは非常に美しい表現、美しい形態を生み出したので、ヒンディー・バーシャーの発想――それは特にこの国の風土に基づくものであったのですが――それをも消し去ってしまったのです。即ち、身分を問わず、全ての人は、パピーハーやコーヤル（何れもカッコウの仲間――引用者註）の鳴き声、そしてチャンパーやジャスミンの花の芳香を忘れてしまったのです。そして見た事もないハザール鳥やブルブル鳥、黄水仙やヒヤシンスを称賛するようになったのです。ルスタムやイスファンディヤールの勇者振り、アルヴェンドやペーサトゥーンの山の高さ、オクサス河やシルダリヤの流れが嵐を起こし、アルジュナの勇者振り、ヒマラヤの緑なす山並、雪に満ちた頂き、ガンジス河やジャムナー河の流れを全く押し止めてしまったのです。」

ウルドゥー文学の近代は、ペルシャ語、ペルシャ文学の影響からの離脱という側面を持ち、以上のようなアーザードの言葉は、ウルドゥー文学の近代への移行を促そうとするものであったと言えよう。

以上の言葉に続けてアーザードは、「疑いもなく、或る点でペルシャ語に感謝しなければなりません。というのは、それのおかげで我々の作品に高い飛翔や激しい力が生まれたのですから。その隠喩、直喩のおかげで数多くの繊細で妙味のある思想を表現する力が生まれたのですから」とペルシャ語のもたらした良い面についても指摘するのであるが、しかし、アーザードによれば、隠喩や直喩は発想の飛翔や繊細さをもたらしたはしたが、「しかし、真の内容を探してみなさい。それは、言葉の繊細さと暗がり、隠喩の闇の中の一匹の螢であり、きらめいたかと思うと消えてしまうのです。」

このように、比喩の技巧のために、真に伝えるべき内容がおろそかにされているとアーザードは批判し、次のように、内容を重視すべきことを説く。

「昔の雄弁の花園の庭番の皆様！ 雄弁とは、誇張や発想の飛翔の翼で飛び、カーフィヤの羽でパタパタ飛んでゆくこと、美辞麗句の羅列や言葉の力強さの力で天まで昇ってゆくこと、そして隠喩の底に沈んで消えてしまうことを言うのではないのです。雄弁さとは、次のことを意味するのです。即ち、喜びや悲しみ、或る物に対する好みやそれに対する嫌悪、或る物に対する恐れ

や恐怖、或る物に対する怒りや憤り——要するに、我々の心にある思いを表現することによって、実物を見ることによって得られるような、まさにそのような感銘、感情、熱情が、聞いている人々の心を覆うということなのであります。勿論、誇張の力、直喩、隠喩の塩は、言葉に妙味と一種の感動を生み出しはしますが、しかし、塩は、塩である程度に必要なものであり、料理全てが塩であってはならないのです。」

ウルドゥー文学が、技巧を重視し、内容を軽視しているというアーザードの批判は、1860年代に行なわれたアーザードの講演の中でもなされており、目新しいものではない。この1874年の講演の注目すべき点は、英語の重要性をはっきり示した点である。

アーザードは、ペルシャ語から隠喩、直喩そしてイザーファの簡略性を採り、バーシャーから、簡明さ、写実性を学ぶべきであると述べた後、今や時代が変わったのだから、従来の方法に満足することなく、ヨーロッパの諸言語に目を向けるべきであると説き、特に、次のように英語の重要性を指摘する——

「皆さんの祖先、そして皆さんは、常に新しい内容、新しい形式の創始者でありましたが、今日の状況に合った、新しい形の衣服や装身具は、英語の箱の中に収められているのであります。」

アーザードによれば、過去に於いてウルドゥー詩の詩文を発展させたのは、バーシャーとペルシャ語の両方を知っていた人のおかげであり、当時のバーシャーとペルシャ語の関係と現在のウルドゥー語と英語の関係は同じであるから、英語を知る人は、ウルドゥー文学の発展に努力しなければならないのであり、過去に於いてバーシャー（そしてウルドゥー語）がペルシャ語から大きな影響を受けて成長したように、今は英語を活力源として前進を図るべきなのである——

「バーシャーに対してペルシャ語が影響を与え、そしてそれからウルドゥー語の詩と散文が一つの独特の妙味を獲得しましたが、それはバーシャーとペルシャ語の双方を知っていた人々のおかげだったのです。考えてもらいたいのですが、昔、バーシャーとペルシャ語の状況であったことは、今日、まさしくウルドゥー語と英語の状況であるのであります。ところで、その詩の中に、もし英語の詩想の反映が見られるとするならば、それは、二つの言葉を知っており、英語の如何なる妙味や詩想がウルドゥー語にとって美しい装身具となり得るかを知っている人々のおかげでありましょう。」

次にアーザードは、従来 of 詩の主題が恋愛ばかりであったことを批判する。アーザードによれば、これまでの詩は、逢瀬の喜び、悲しみ、別れの涙、酒、酌人、春、秋、天への恨み、成功の祝辞といったことばかりで、その内容たるや空想的で、時には複雑で理解困難な隠喩で表現されているのである。

このように批判した後、アーザードは、次のように、英詩を手本として詩題の拡大を図るべきであると主張する。

「私は、英語の中では、あらゆる種類の事柄が散文よりもはるかに美しく詩作されていること、そして素晴らしいことに、作品に命が吹き込まれ、内容の命に恩恵を与えられているのを見る時、

どれ程嘆くことでしょうか。しかし、我々は一体？ 聞いて恐れ入るべきです。己を見て恥じ入るべきです。ああ、我々が書いている脈絡のない散文程の力が詩の上にも生じたならば。そのことの高い水準の見本は英語の中に存在しているのであります。」

そしてアーザードは、次のように聴衆を勇気づける――

「にもかかわらず、我々を見るのです。我々の祖先がラディーフやカーフィヤと共に、素晴らしい韻律や繊細な発想の資本を我々のために残していつてくれたので、もし、我々が勇気を出したならば、誰にも引けをとることはないであろうということを。」

この言葉は、アーザードが、過去の詩的伝統を全て否定していたのではないことを示しており、従って、従来のウルドゥー詩の伝統を無視することなく、英詩のように様々な内容で詩作すること――これが、アーザードの主張であったと言えるであろう。

この後アーザードは、聴衆に向かって、ウルドゥー詩の刷新という困難な作業に立ち向うよう、激しい口調で訴えかける――

「おお、我が祖国の人々よ！ 数日の内にこの現在流行中の詩を詠む人が一人もいなくなるだろうということがこの目に見えるとき、同情の目は涙を流すのです。その理由は、価値のなさの故に、もう詠む人々が生まれまいであろうからです。いくつかの古い偶像が残っていますが、それらは朝の灯火。結末はこうです――我々の言葉は、或る日、詩を全く持たないようになり、ウルドゥー語の詩の灯りはすっかり消えてしまうのです。

「我が祖国の人々よ！ さあ、後生ですから自分の国の言葉を憐れんで下さい。さあ立って！ 祖国と祖国の人々の古来の名誉を破滅から救って下さい。わずかな限られた範囲に、それどころか、いくつかの鎖に縛られつつある皆さんの詩を、それを自由にする努力をして下さい。さもないと、皆さんの子孫は、その言葉が詩の名を欠くような、そのような時代に直面することでありましょう。祖先の名誉、先祖の財産を欠くようになるのは、非常に悲しむべきことなのであります。」

このように訴えかけた後、アーザードは、ヒンドゥー、ムスリムそれぞれに向ってこう呼びかける――即ち、ヒンドゥーは、物事の真実を表現するのに無類の言葉であるパーシャーを持ち、その古典語たるサンスクリットたるやずば抜けた詩作力を持つ言語である。一方、ムスリムの先祖はアラブで、アラビア語というのは、男は言うに及ばず、女ですら、話に熱が入ると、その言葉が力強い詩となってしまうような言葉である――

「これは一体悲しむべきことではないでしょうか、このような先祖の子孫がその先祖の遺産を持たないでいるということは？ これは一体嘆くべきことではないでしょうか、今日、我々の言語が感動の言葉を持たないでいるということは？ これは一体哀しむべき事ではないでしょうか、他の人々の前で我々の言語が、表現の弱さと共に、千もの欠点のために非難されるのは？」

このように訴えた後、アーザードは、自作のマスナヴィー『偉大なる夜』の朗読に移っている。アーザードは、講演によってウルドゥー詩刷新の必要と指針とを理論的に説こうとし、マスナヴィー『偉大なる夜』によって新しいウルドゥー詩の実例を示そうとしたのであった。

この講演会の事実上の組織者であったと考えられる、パンジャブ州教育局長ホルロイドは、アーザードの講演とマスナヴィーのコピーを、他の州の教育局に送り、新しい詩の基礎が築かれるよう、或いは、少なくとも、教師達が新しい詩に対して考えを述べる機会が得られるよう、それらを印刷して学校に配布するよう要請したということである。

アーザードの講演とマスナヴィーに対して、パンジャブ以外で当時どのような反響があったか、という重要問題について、ムハンマド・サーディクは、ラックナウー以外では、このパンジャブのウルドゥー詩刷新運動はあまり検討されなかったようだとし、1874年7月1日付のアワド教育局の新聞に掲載された、この運動に関する二つの論文を紹介している。その内の一つは、ムンシー・サイイド・グラーム・フサイン（*Munshī Sayyid Ghulām Husain*）という人物によって書かれた論文で、アーザードは、ウルドゥー詩を、美辞麗句や隠喩、直喩から解き放って英語の詩のようにしようとしている、恋愛の詩題を慎ませ、神の称賛や道徳的な内容で詩作させようとしているとし、英語教育が普及し、我々の思考、慣行などが変わらない限り、英詩のような詩を書くのは不可能であり、また、ウルドゥー詩は、恋愛だけを詩題としてきたわけではないし、恋愛は詩の生命であり、恋愛について詩作するのは何ら問題がない、とアーザードを批判している。

もう一つの論文は、ラックナウーの師範学校教師ムンシー・ゴービンド・ラール（*Munshī Gōbind Lāl*）という人物の書いたもので、ウルドゥー詩には、恋愛詩以外のものもあるが、しかし、それらは学生のためのものであり、詩を学ぶには、現行の、美と恋、逢瀬と別離とを主題とする詩による他はなく、それらは明らかに人を墮落させるものである、また、アーザードは、イギリス人統治者に遠慮したのかもしれないが、我が方にも、実際の出来事、知的な事柄、道徳的な事柄が簡潔明瞭、味わい深く、色彩豊かに、繊細かつ堅実に詩作されたし、また、詩作され得るような規則がある、とアーザードに反論する内容の、いささか趣旨の明確でない論文である。

次いでサーディクは、『パンジャビー・アクバル』（*Panjābī Akhbār*）に掲載された、アーザードを支持する論文をいくつか引用しており、反響の大きさを知ることが出来ないが、当時、アーザードの指導したウルドゥー詩刷新運動に対して賛否両論のあったことが分る⁽³³⁾。否定論に対してアーザードは、自ら反論の筆を執るということにはなかったようであるが、『アーザード論文集』第2巻に、一篇だけ、アーザードの反論が収録されている。これは、先述のグラーム・フサインの批判に対する反論で、「新聞に寄す」（*Akhabār se Khitāb*）という題で『アーザード論文集』には収められているが、これはアーザードの原稿から採られたもので、実際に公表されたかどうかは不明である⁽³⁴⁾。

グラーム・フサインのアーザード批判は、二つの点からなっていた。その第一は、アーザードはウルドゥー詩を隠喩、直喩から解き放ち、英詩のようにしようとしているというものであった。これに対してアーザードは、『新聞に寄す』の中で、隠喩、直喩を全く否定したのではなく、限度が必要であると講演で述べたのであり、また、ペルシャ語からも必要に応じて隠喩、直喩等を採り入れるよう述べている、と反論している。

その第二は、アーザードは、恋愛以外の主題で詩を書くべきであると言うが、ウルドゥー詩では恋愛以外の詩題でも詩が作られているし、恋愛は詩の命である、という趣旨の批判であった。グラーム・フサインは、アーザードを批判した後、マルスィヤ詩人として有名なアニースやダビールの作品を学校教育で用いればよいし、ソウダー等のガザルの選集を編めばよい、と提案しているが、このような、グラーム・フサインの批判と提案に対して、アーザードは、まず、アニースやダビールの作品は優れてはいるが、それは一つの宗派に関係したものであり、また、ガザルの選集を編むことによって所定の目的は達せられない、と反論、次いでこう述べている。

「恋愛の詩題に関して、あの方がおっしゃられた事は、勿論、私の見解でもあります。即ち、恋愛なくして作品は塩気のないものとなるのです。しかし、私の講演の何処にも、恋愛詩を全くやめるべきである、とは言っておりません。それに、英詩自体、恋愛がない訳ではないのです。」

「もっとも、勿論、我々の詩の内容は、恋、酒、酌人、春と秋、天への不満、貴族への追従等々が主題であり、この限られた所からも、もし、少しでも出ようとする、つまらなくなってしまう、とは申しました。しかし、私やあなたの郷土^{くふ}の人が、言語の中に、あらゆる出来事、知的な事柄、道徳的内容を、詩人達が自分のガザルやカスィーダの中で、或は、ミール氏^{ミール}がそのサラームやマルスィヤの中で詩を称賛しているように、そのような素晴らしさで表現出来るような力を生み出せるような何か手だてを考えなければなりません。小生は英詩の喩えをこのような観点から出したのです。そうでなければ、誰もが知っているように、英語であれ、アラビア語であれ、ペルシャ語であれ、或る言語の思想をその独特の形式で表現している単語や衣服は、他の言語の中に入ると全く味気なくなってしまうものなのです。」

この時期のアーザードの文学観を示すものとして、『空想の魔術』に収められている「ウルドゥー語と英語の詩文についての若干の考察」(Urdū Angrēzī Inshāpardāzī par Kuchch Khayālāt) というエッセイがある。『空想の魔術』の初版は1880年に出版されたが、このエッセイは、ファッルキーによると、カスール (Qaṣūr) という町の啓蒙団体の雑誌の1875年5月号に掲載され、若干の語句の修正の後、『空想の魔術』に収められたものである。

このエッセイの中でアーザードは、或る言語が教育有る人々の間で尊重されるのには二つの理由がある、として次のような理由を挙げている。

1. その語彙が知的内容を表現するのに充分であること。
2. その詩文が如何なる形式ででも内容を表現する力を持っていること。

ウルドゥー語はこの二つの要件を満たしているが、不充分である、とアーザードは述べ、第一の点については、ウルドゥー語がまだ若い言語であり、知識のない時代に生まれ育ったためである、として学芸を獲得し、国に普及させることによってウルドゥー語を知的な言語にしてゆくべきであると説いている。第二の点に関しては、新奇な比喩の追及と恋愛詩のみの詩作のためにウルドゥー詩は憐れむべき状態となっていると述べ、英語を学ぶべきであると主張、次のように付け加えている――

「これは、我々がペルシャ語、アラビア語の単語をウルドゥー語で話しているように英語の単語を話そうとか、その慣用句や術語の訳をウルドゥー語で用いようとかいうことではない。」

アーザードによれば、人間の考え方というものは国が違ってても似通った所があるから、他の国にも影響を与えるのである。「即ち、注意深く見れば分るように、二つの民族の接触によって、常に一つの言語は他の言語から影響を受け続けたのである。見よ、バーシャーをペルシャ語、アラビア語が来て覆った時、そのどのような影響が生じたか、そして今、英語が如何なる内的影響を及ぼしているのかを。」

そしてアーザードは次のように書いている。

「要するに、もし我々の方法が古く、使いふるされたものとなってしまうのであれば、我々は英語の庭から新しい苗木を採って自分の花園を飾るべきなのである。」

以上のように、アーザードは、このエッセイに於いても、英語を積極的に学ぶべきであると主張している。アーザードにすれば、或る言語が他の有力な言語の影響を受けるのは当然であり、他の優れた言語を学ぶのは決して罪ではないのである。(尚、先の「新聞に寄す」でも、このエッセイの中でも、アーザードが、英語の単語、術語、慣用句の導入といった表面的なことではなく、より深い次元での英語摂取を唱えている点に注意しておく必要があろう。)

英語こそウルドゥー文学刷新の鍵であると考えるアーザードは、1874年の講演と同じように、英語とウルドゥー語の二つの言語に通曉することの必要性を強調し、英語とウルドゥー語の両方を知る者に期待をかける――

「もっとも、この二つの言語に十分に通じている必要がある。その運用は、かつて我々のウルドゥー語、ペルシャ語の散文家が行なったように、美しいものでなければならない。そしてもう一度言うが、この目的が達成されるのは、常に、この二つの言語に十分通じている、英語を知っている人々によってであろう。何故なら、彼等の二つの目が開いているからである。ウルドゥー語は自分の言葉であり、そして、英語という鍵を神が与え給うたのである。我々や我々の仲間は、旧態依然で、行なうべきことは行なってしまった。この領域に於いて、最早、我々にできることはないのである⁽³⁵⁾。」

以上のように、このエッセイに於いても、アーザードは、ウルドゥー文学の基礎が、ウルドゥー語プラスペルシャ語からウルドゥー語プラス英語へと転換したことをはっきりと宣言しているのであるが、先の「新聞に寄す」が示しているように、アーザードは、ペルシャ語からの隠喩、直喩、イザーファの借用という文学的伝統を否定したのではない。ペルシャ語は既にウルドゥー語に活力を与えることができなくなっており、ウルドゥー文学の活性化、ウルドゥー文学の刷新のためには、英語を学ぶべきである、というのがアーザードの見解なのであった。

以上、アーザードの文芸思想を検討してきたが、ここで再度、それを整理しておくならば、この時期のアーザードの文芸思想の要点はおよそ次のようになろう。

1) ウルドゥー詩は墮落し、恋愛詩が中心となっており、技巧中心で内容空疎である。

2) ウルドゥー詩墮落の原因となったのは、人々の好み、特に王侯貴族の好みに詩人達が迎合したからである⁽³⁶⁾。

3) ウルドゥー詩を墮落から救うためには、恋愛ばかりを詩題とすることなく、他の事柄も詩題とすべきである。社会的な事柄も詩題とし、国民の啓蒙に努めるべきである。

アーザードは、ウルドゥー詩刷新のためには、既に桎梏と化したペルシャ文学の影響から離脱し、英文学を学習すべきであると主張して、ウルドゥー文学の参考にすべきモデルを英文学に求めた。これは、中世的文学世界から近代的文学世界への移行の必要を宣言するものであったが、しかし、他方でアーザードは、インド的な比喩の使用、パーシャ的簡潔性の必要といったことにも注意を促し、インド性を重視する態度をも示していた。この後者の点もアーザードの重要な論点の一つであり、看過されるべきではない⁽³⁷⁾。

[註]

- (1) インドで最初のウルドゥー新聞は、1822年、カルカットで発行された『ジャーメ・ジャハーン・ヌマー』(Jām-e Jahān Numā)。
- (2) デリー・カレッジは1825年に設立され、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語が教えられた。1828年には英語科も設立された。単なる語学校ではなく、数学、地理、自然科学等も教育された。
- (3) 入学年は不明。サーディクは1847年頃、ファッルキーは1845年とする。
- (4) Aslam Farrukhī, *Muhammad Husain Azād : Hayāt aur Taṣānīf*, Vol.1, Karachi, 1965, p.84.
尚、当時デリー・カレッジには、アラビア語学科に、後に小説家として有名となるナズィール・アフマド、ペルシャ語学科に後に文学者、教育家として活躍するザカーウッラーがいた。
- (5) Muhammad Sādiq, *Muhammad Husain Azād : Aḥwāl-o-Āthār*, Lahore, 1976, p.20.
- (6) 『デリー・ウルドゥー・アクバル』は、「インド大反乱」の際、ムガル皇帝バハドゥル・シャーII世の雅号ザファルを採って『アクバル・アル・ザファル』(Akhbār al-Ẓafar)と改称し、1857年9月13日まで発行された。
- (7) この偵察旅行の偵察内容については、サーディクの上掲書巻末付録を参照。
- (8) ファッルキーによると、中央アジアへ行く前にアーザードは教育局を辞めていた。
Farrukhī, *op. cit.*, p.191.
- (9) この頃アーザードが編纂した教科書は、インド史、ウルドゥー語読本、ペルシャ語読本である。ウルドゥー語読本は、パンジャブ州教育局長ホルロイドの名で出版され、アーザードの名は記載されなかった。
- (10) 第一部と第二部はビヤーレー・ラール・アーショープによって執筆された。
- (11) Taḥsīn Sarwarī, “Taṣānīf-e Āzāid ke Tīn Maṭbū‘ah Nuskhe” (雑誌 *Ṣaḥīfah*, Lahore, 1972年4月号所収) 参照。
尚、サルワリーによると、1917年にも『忠告の耳飾り』が出版されているが、この時は4,000部も出版されている。
- (12) 『アーザード論文集』第2巻に収められている。
- (13) ファッルキーによると、静いの原因は、『イスラーム年代記』が不評であったことや、アーザードが『イスラーム年代記』第2部の執筆を急がなかったことにあるようである。
Farrukhī, *op. cit.*, p.223以下参照。
- (14) アーザードはシーア派に属した。

- (15) モーミンの伝記資料を提供したのはハーリーだとされている。
尚、ファッルキーは、初版と第二版との相違点を17箇所にわたって指摘している。
Farrukhī, *op. cit.*, vol.2, pp.14-20.
- (16) Muḥammad Ṣādiq, *Āb-e Hayāt ki Himāyat men aur Dusrē Mazāmūn*, Lahore, 1973 所収の「『空想の魔術』とその源泉」という論文に詳しい。
- (17) Farrukhī, *op. cit.*, vol.2, pp.341-342.
- (18) グラーム・フサイン・ズルフィカールによると、『空想の魔術』の初版と第二版では少し異同がある。
また、『空想の魔術』第二部の原稿は未完成であったので、アーガー・ターヒルが手を加えている。
Ghulām Husain Dhu al-Fiqār, “‘Nairang-e Khayāl’ ke Maṭbū‘ah Nuskhē” (雑誌 *Ṣaḥīfah*, Lahore, 1971年 4月号所収) 参照。
尚、『空想の魔術』は、パンジャブ州事務次官 Lepel H. Griffin に捧げられていた。
- (19) 尚、後者のタイトルには、「美と恋の束縛から自由である」と但し書きが付けられている。
- (20) アーザードという雅号は、ゾウクによってつけられたものだという。
- (21) 「インド大反乱」の際、アーザードは取るものも取りあえずデリーを脱出しなければならなかったが、それでもゾウクの詩を書き留めたノートは持って逃げたという。
- (22) アーザードがパンジャブ教育局に入局した時期について『アーザード論文集』の編者は1862年とし、ファッルキーは1864年としている。
- (23) Farrukhī, *op. cit.*, vol.1, p.148
- (24) ファッルキーによると、パンジャブ州政府の高官が初めてパンジャブ協会の会合に出席した日時は次のようになっている。
3月17日 教育局長フラー
4月17日 事務次官ソーントン
4月29日 州知事マクレオド
アーザードが、「インド産業の発展」という講演を行なった4月7日に、実際にパンジャブ州事務次官が出席していたのかどうか、日時に誤りがないかどうかは、今後の調査が必要である。
- (25) ファッルキーによれば、アーザードは7月にマリーに行き、9月にはカーブルに到着、そのまま中央アジア偵察旅行に出ているので、10月にラホールで講演を行なっているのはおかしな話である。『アーザード論文集』そのものの別の箇所でも、1865年10月3日の会合にはアーザードはいなかったと記されている。
- (26) 『アーザード論文集』第1巻やファッルキーは、7月としているが、内容より判断して、4月と変更する。
- (27) 『アーザード論文集』第1巻の目次では1867年8月となっているが、作品解題では1868年8月としている。ファッルキーは1867年8月としている。
- (28) アーガー・ムハンマド・アシュラフによると、ホルロイドの前任者であったフラー (Fuller) は、アーザードに西欧の詩の良いところを取り入れるよう勧めていたし、英語の読めないアーザードのために、フラーとビヤーレー・ラール・アーショープは、優れた詩をウルドゥー語に訳していたという。
Āghā Muḥammad Ashraf, *Āb-e Hayāt ke Laṭīfē*, Lahore, 1947, p.80 以下参照。
フラーは1867年8月に不慮の死を遂げるので、アーガー・ムハンマド・アシュラフの伝記が正しいとすると、アーザードは、1867年8月以前に、フラーやビヤーレー・ラール・アーショープの助力を得て、その文芸思想を形成しつつあったことになる。
- (29) この引用文中で言及されている詩会が具体的に如何なるものであったかは不明であるが、1874年の詩会以前にも、目的意識をもった詩会が開かれていたことが、この引用文から分る。
- (30) 『インドの慣習』の事実上の執筆者は、ビヤーレー・ラール・アーショープである。
- (31) 『アーザード論文集』第2巻によると、この劇は1869年頃執筆されたもので、公表されなかった。
Āghā Salmān Bāqir, *Muḥammad Husain Āzād : Hayāt, Shakhshiyat, Fam*, Lahore, 1981 によれば、この劇は上演され、1867年4月、報奨金200ルピーを受けたという。
- (32) アーザードは、ガヴァメント・カレッジ校長の指示でマクベスの翻訳をしたり、自ら「アクバル」という戯

曲を執筆したりしている。何れも未完であるが、アーザードの文学的関心の広さを窺わせるものである。

- (33) アーザードの書簡によると、ラックナウーでも、新しい形式の詩会が催されるようになる。「ラックナウーに於いても一つの詩会が始まり、そこでも可能な限り、内容の包括性に努力することに大部分の力が注がれているのです。」(1874年9月27日付書簡)

パンジャープでは、アーザードの運動は厳しい批判に直面した。(この点については次章で検討する。) ファールキーの前掲書第1巻279ページ以下によると、アーザードはパンジャープの批判勢力についてアフマド・カーンに手紙で知らせている。1874年10月19日に、アフマド・カーンは、次のような、アーザードの運動を支持する返事を書き送っている。「私の非常に昔からの願いは、この詩会によって実現されました。私が、我が詩人達がネーチャーの状態の表現に関心を向けることを長い間望んでいたのです。」

また、アフマド・カーンは、1875年2月7日の『倫理の浄化』に、「散文の知識とウルドゥー詩」という、アーザードの運動を支持するエッセイを執筆、掲載している。

- (34) この「新聞に寄す」と同じものが、『アーザード書簡集』にも収録されている。(但し、『アーザード論文集』のテキストにない文章も『アーザード書簡集』には収録されている。)

この「新聞に寄す」は、1874年6月30日の詩会への招待状の裏に執筆されており、『アーザード書簡集』の編者は、『アワド・アクバル』のために執筆されたのであろうと推測している。

Sayyid Murtaẓā Ḥusain Fāẓil Lakḥnavī (ed.), *Makātīb-e Āzād*, Lahore, 1966 を参照。

- (35) ハーリーは、『空想の魔術』の書評の中で、このようなアーザードの考えを批判し、国民が、西洋の学問、西洋の文学を自分の国の言葉で理解しない限りは、その思考に成長は見られないであろうと述べ、英語に囚われなかった者の方が国民のためになる仕事をしていると反論している。
- (36) 因みに、『生命の水』に於いて、アーザードは、英語が力強く、雄弁な言語になった理由を西欧の民主的な体制に求めている。
- (37) 1860年代後半から1870年代前半にかけて形成されたアーザードの文芸思想は、その後、基本的に変化しなかったと思われる。

第1章への補註

第1章の中に、説明不足の所や訂正すべき点がいくつかあったので、ここに記しておく。

- (1) 1874年、ウルドゥー詩刷新運動が展開された時のパンジャープ州知事の名前は、Robert Henry Davies である。(在任期間 1871年-1877年)。尚、マクレオドが州知事を務めたのは1870年まで。
- (2) 第1章の引用文中の括弧内の語句は、引用者の註。
- (3) 1867年8月に提出されたブリティッシュ・インディアン・アソシエーションの請願書の引用は、Ghulām Ḥusain, *Tārīkh-e University Oriental College, Lahore*, Lahore, 1962 より行なったが、その後入手した英語原文とグラーム・フサインのウルドゥー訳に異同のあることが判明したので、当該箇所の英語原文を次に掲げておく。
1. We respectfully submit that by the terms 'education through the vernacular' we do not mean the revival of Asiatic learning and science as subjects of instruction. On the contrary, we seek only the diffusion of the sciences and arts now prevalent in Europe, since we aim at nothing else than the universal spread of European enlightenment throughout all India.
 2. The Punjab Government, admitting the necessity of an Oriental University, has essayed to commence its foundation. The aims and objects of this are excellent, but those of the University which we solicit for these Provinces are superior. The first has for its scope the revival and culture of Oriental languages; the latter seeks to be the means of diffusing throughout the country European learning and civilization;—the attainment of such an object would change the whole condition of Hindoostan.

(1990. 5. 8 受理)